

## 評書

春名好重 著

### 『寛永の三筆』

本書は、すでに『藤原佐理』・『古筆辞典』・『てかがみ』・『古筆の鑑賞』・『近衛家伝来国宝大手鑑解説』等の好著をはじめ多数の論考を発表されて、書の歴史の権威として著名な春名好重教授の近業の一つである。

本書の体裁は、まさに姉妹編として同じ発行所から公刊された堀江知彦氏の『三筆三蹟』のそれにならない、B5判、カラー写真二葉、グラビア写真九六頁、本文・解説一七二頁、藍青色布張りの堅紙を表紙とし、これに光悦の扇面月兎図のカラー刷ビニール装カバーをかけ、瀟洒堅牢な美本をなしている。また、本文は五号、解説は九ボの活字を用い、さらに本文の随処に多数の参考写真を挿入してあつて、きわめて見やすく、読みやすい。

本書の内容は、「寛永の三筆」として名高い近衛（三藐院）信尹・本阿弥光悦・松花堂（滝本坊）昭乗の三人の能書について、著者多年の研究に基づき、その歴史的地位を明らかにするとともに、それらの一つ一つの書跡について鑑賞の要点を明確に指摘したものである。書跡の写真には、陽明文庫、東京・京都国立博物館、徳川美術館、妙蓮寺、法華経寺、常照寺、建仁寺禅居庵、仁和寺等の所蔵にかかる真跡を精撰し、必要に応じてそれらの部分拡大写真をも示しており、資料としては万全に近い。また、本文に展開された書を中心としてのわが国近世初頭の桃山時代の文化史論は、学界の研究成果をふまえて独自

の見解を示す興味ある叙述であり、歴史書としても、また芸術評論書としても、非凡な価値をもっている。

本文の構成は、「桃山時代の書」と「寛永の三筆の書」との二部より成る。「桃山時代の書」は、「桃山時代の三筆、書の歴史の桃山時代、古典の復興、古筆の鑑賞、日本趣味の流行、解放された時代、新しいものの尊重、大きいものの尊重」の八章に分け、「寛永の三筆の書」には、「近衛信尹と近衛流、本阿弥光悦と光悦流、松花堂昭乗と松花堂流」の三章を設けている。

先ず「桃山時代の三筆」において、著者は、いわゆる「寛永の三筆」の「寛永」は「寛永年間」と解すべきではなく、「近世の初め」もしくは「桃山時代」と解すべきであることを説き、また「三筆」には、信尹の代りに近衛信尋・鳥丸光広・近衛前久・池田松斎などを入れる諸説もあるが、それらがいずれも生存年代や書の創造性という点からみて、決して適当でない所以を説き、ともにきわめて説得的である。そして、この三人が能書として特別に尊重されるのは、三人の書跡が「最も巧妙にして優秀であるばかりでなく、その書風はいずれも古典的で、しかも桃山時代的であり、清新にして個性が鮮明であるからである」とされ、また「この三人の書の特徴を一言でいえば、信尹の書は最も筆力があり、強い書であり、光悦の書は最も自由にして変化に富む書であり、昭

藤 本 邦 彦

乗の書は最も洗練されていて、巧妙な書である」(一一一頁)とされているところは、まことに評し得て妙なるものと同感に堪えない。

ところでこの章は、いわば本文の総論であつて、以下の諸章は、その各論とみられる。

すなわち、次の「書の歴史の桃山時代」において、著者は先ず周到なる用意を以て「桃山時代」の時代規定を論じ、一般政治史では徳川幕府開設後を江戸(徳川)時代とするけれども、文化史では三代家光の寛永年間までは織豊政権の時代にあわせて桃山時代とするとしていられるが、これは確かにその通りである。著者はこれをさらに書の歴史の立場から見ても、古典復興の潮流にのつて和様の上代様がさかんであつた桃山時代と、中国文化の尊重から唐様がさかんになる一方、幕藩体制が固定化し、文化が停滞して、型にはまつた御家流が行した江戸時代とは明らかに区別すべきであることを切言していられるのは、まことに正しい。

さて、右の時代規定がなされた上で、以下この時代の主要動向が逐一論ぜられていく。すなわち次の「古典の復興」では、室町幕府が衰えて信長、秀吉がこれに代るが、彼らは一面では古代的權威を無視しながら、他の一面ではこれを尊重し、貴族文化によつて自己を修飾し、かつ自己の權威を高めることを図つたと説かれるとともに、一方彼らの施策で生活を安定し得た公卿は、すでに政權を失いながらも古典文化の保持者たることを誇りとしていたから、古典の復興に努力したとして、これを幾多の事実によつて細叙されている。次に「古筆の鑑賞」では、茶の湯の發展によつて、古筆の鑑賞が流行してきたことが説かれる。茶室の掛物として古筆の需要が多くなり、古筆切も作られるようになったし、古筆切を集めた手鑑の作製もはじまり、古筆の鑑定を家業とする古筆家も生まれたが、この古筆の鑑賞から「古代の書のすぐれているのを知るとともに、当時の書の平凡で陳腐であるのに気付き、古筆を規範として書を学び、

新しい桃山時代風の書を書く者が輩出した」(一三〇頁)とされている。次いで「日本趣味の流行」では、桃山時代には、前時代の中國尊崇の念が薄れて、日本文化への回帰がはじまつたことが説かれる。中にも本阿弥光悦の「本阿弥行状記」の考え方はやや偏狭ながら、この傾向をよく示しており、茶の湯や絵画にも同様の傾向が著しいとされている。

次に著者は、「解放された時代」で、桃山時代が中世の束縛から解放された自由な時代となつた事情を明らかにし、当時の人びとは自由に、個性豊かな書を書くことができるようになったが、その場合、上代様の復興とはいつても、上代様と全くことなり、清新な桃山時代風が顕著になつたとされる。次の「新しいものの尊重」では、古い權威が尊重された時代が「古い時代」であり、それが否定された時代が「新しい時代」であると説き、新しい時代には、ものの見方、考え方が変わるから、価値観も変り、同時に好尚も変るとされる。「変革期」には、いつも革新的發展と復古的傾向とがみられる。桃山時代の復古的傾向の一つは古典の復興だが、古典の復興は古典の再現ではなく、古典に返り、それを出発点として新しい創造をするのである」(一四〇頁)とされるところは、まさに現代にも通ずる適切な提言であらう。この故にこそ、上代様を学んだ信尹・光悦・昭乗らは、いずれも上代様の模倣ではなく、新しい書の創造であり、またその故にこそ今日尊重されるとされるのは、きわめて妥當な見解であらう。次に「大きいものの尊重」では、桃山時代では大字のかなを書くようになったことに着眼し、その他かなばかりでなく大字や大きな構図の絵画がかかるようになったことと併せて、これもこの時代に、解放された国民の元氣があふれ、覇者もまた自己の強大を誇示するためにこれを好むようになったことを背景としていることを論じ、これをさまざまな例証をもつて説明していただけることも興味深い叙述である。以上の各論は、各章相関連するものだけに、叙述配置の苦心も想察されるところであり、読者の理解を求めるためには

先ずはよく工夫された適宜な構成と認められようかと思う。

第二部にあたる「寛永の三筆」の書では、三者それぞれの経歴や人となりの詳細に論述し、それぞれの開いた流派についても、それぞれの特色とその伝流の大勢に論及されている。これらの人物の言動については、種々伝説的なものが多いが、著者はその取るべきは取り、捨てるべきものは捨てて、あくまで学問的立場を堅持されているのは流石である。

最後に「解説」においては、本書に収録した書跡の一つ一つについて、読み方、意味、書かれた年代、鑑賞の要点にわたってきわめて懇切であり、著者の該博な知識にはいつもながら感服させられるところである。

これを通じてわれわれは、これらいわゆる「寛永の三筆」の時代を明らかにするとともに、彼らの人間性を把握して、その貴重な書跡を十分に鑑賞することができ、「あとがき」に書かれた著者の意図はみごとに達成されているということができる。

ただ図版33・35の「信尹」は「信尋」、本文の「智仁」のルビ「ともひと」は「としひと」（一一九頁）、「天主閣」は「天守閣」（二四四頁）とすべきような校正の誤りとみられるところもないではないが、これはこれだけの書冊にはやむをえぬところと考えられる。

また蕪辞、著者の本意を誤り伝えたところもあろうことを恐れ、その非礼については著者ならびに読者の寛恕を仰ぎたい。（本学教授）

「寛永の三筆」B5判・二七七頁・定価二、三〇〇円

昭和四十六年十月、淡交社刊